

不機嫌な婚約者と永遠の誓いを

目次

不機嫌な婚約者と永遠の誓いを

5

番外編 甘い生活は新たな発見とともに

279

不機嫌な婚約者と永遠の誓いを

図書館に入ると本の独特の香りがした。

鷹野由衣はその匂いを胸いっぱい吸い込み、一人でにんまりと笑う。由衣は子どもの頃からこの図書館に通っていた。学校の図書室よりも本の種類が多く、この辺りで一番大きな規模であることもあり、今の由衣にとって一番のお気に入りの場所だ。

春休みとはいえ、平日の昼間にのんびりと本を読めることがどれほど幸せなことか、由衣はそれなりに理解していた。

大企業とまではいかないけれど、その専門分野では名の知れた会社を父親が一代で築き上げたおかげで、由衣は幼い頃から何不自由なく育ってきた。

幼稚園から通っている私立聖女学院はお嬢様学校として大変有名で、旧華族や財閥系の本物のお嬢様から、由衣のように一般的なお嬢様まで大勢通っている。良くも悪くも狭い秘密の花園のような世界だったけれど、由衣は楽しく過ごしていた。

その大学部を先日卒業し、そのまま大学院に通うことも決まっている。もともと勉強が好きなのともあって、もう少し学びたいと思ったからだ。

図書館の中は少しひんやりとしている。自分のお気に入りの席に向かおうとした時、顔見知りの司書から声を掛けられた。

「あ、鷹野さん。予約してた本、ついさっき届きましたよ」

「本当ですか？　ありがとうございます」

由衣はいそいそとカウンターに向かい、司書から本を受け取った。ずっしりと重たいそれはクトゥルフ神話の本だ。随分前から探していたけれど、人気のある本でいつも貸出中だった。やっと順番がまわってきたことに、由衣は喜びを隠せない。

「そういうのもお好きなんですね」

司書からそう声を掛けられ、由衣は頷く。

「はい、最近はまだ物語系に凝ってまして」

由衣は昔から本を読むことが好きだった。物語から実用書、図鑑や辞書まで、興味のあるものはすべて読んでいる。それによって知識を得て、どんどん物知りになっていくことが楽しかったのだ。それは今でも続いていて、勉強以外の本もたくさん読んでいる。インターネットが普及している今、知識はネットで得る方が早いかもしれないけれど、紙の本をじっくりと読む方が由衣の性に合っていた。

「神話系なら、北欧神話も面白いですよ」

司書が、おすすすめしますと笑って言う。

「まあ。では次はそれを読んでみます」

また一つ楽しみが増えたわ。

由衣はそう思いながら、受け取った本を抱えて、お気に入りの席に座った。その後、三時間ほどじっくりと本を読む。読み切れなかったものは借りて、図書館を出た時には夕方になっていた。

「こんなによつくり出来るのも、今のうちだけね、きつと」

一人呟き、由衣は家に帰るべく歩き出した。

二十歳を過ぎても自立していないことに多少の罪悪感があったけれど、学友のほとんどが同じような状況だったこともあって、その環境に甘えていることは否めない。一人娘である由衣を、父や母が甘やかしていることも十分理解していた。

所詮、わたしは世間知らずだ。

由衣は平日頃からそう思ってきた。お嬢様育ちの由衣だったが、考え方はそれなりにリアリストなのだ。

昼間よりも気温が下がり、ジャケットを着ていても少し肌寒い。そんな中でも空気には春の気配を感じる。

由衣は新しい生活への期待で溢れていた。四月から始まる大学院生活を思うと、足取りが軽くなり、鼻歌でも歌いたくなる。

「春って特別だわ」

また呟き、家路を急いだ。

由衣の家は都内のいわゆる高級住宅街の中にあつた。両親と由衣の三人で住むには大きなこの家は、由衣が生まれ育ってきた場所だ。その家が視界に入ると、いつでも安堵する。

「ただいまー」

鍵を開けて中に入った瞬間、由衣は違和感に気づいた。

いつも夜遅くにしか帰ってこない父の革靴が、そこにあつたからだ。

「お父さん、もう帰ってるの？」

声を掛けながらリビングに入ると、父と母が向かい合うようにソファに座っていた。その様子が見てかおかし。

由衣に気づいた父が顔を上げ、いつもの笑顔を見せた。

「由衣、おかえり。お父さん、会社を首になったよ」

やけに明るい口調で父が言った。明るすぎて、その言葉の重みに気がつかなかつたほどだ。

由衣はかつてないほど戸惑った。由衣の記憶に間違いがなければ、父は社長だったはずだ。社長を首になったとはどういうことだろうか？ 素直にそう尋ねると、父は首を傾げながら言った。

「どうやら背任行為があつたらしいんだ。防犯カメラにも証拠があるって。取締役会議でそう言われたら、まあ仕方ないよね」

「……まあお父さん、そんなことしたの？」

母もまた、やけに呑気に尋ねた。母は地方の大地主の娘で、それこそお姫様のように育ってきたそう。父も若い頃は貧乏だったらしいが、この二人がどこでどうやって出会ったのか、教えても

らっていないのでわからない。でも、父が母を本当に大切にしていることはよく知っていた。

「いや、した覚えはないけどね。まあ、こっちにも無罪の証拠がないし。仕方ないよ」

「そんな他人事みたいに……」

仕方ないで済む話なのか、由衣には甚だ疑問だ。

娘の由衣が言うのもなんだが、呑気な性格の父親には経営に関してかなりの才能がある。今の会社を立ち上げ、そして大きくしたのは、父の功績だ。そしてなにより、そんな犯罪を犯すような人間ではないことも、娘としても信じたい。

「首になって、これからどうなるの？」

さすがの母も少し不安げだ。

「いろいろあつて、この家も明け渡さないといけないんだ。お父さんの持っている会社の株もね。個人名義の預金は多少あるけど、ほとんど会社の株にしていたから……」

つまり、我が家に残されたものはほとんどないということか。

「再就職先には当てがあるから、しばらく我慢してほしい」

母を宥める父を見ながら、由衣は自分の今後を考えていた。

今この時から、これまでのような生活が出来なくなることは理解していた。あまりにも突然で、心の底から納得しているわけでもない。疑問や不信感はある山のようにあるけれど、それを解決するのは今じゃない。

由衣はただこの現実を受け入れ、そして前を向いて進むしかない。

大学院に進むことは、もう無理だろう。私立の大学院の学費がどれほどのものか。今そこにお金を使うよりも、出来ることはある。

「進学はやめて、わたしも働くわ」

そう言うと、父がはじめて悲しそうな顔をした。

「いや、お前の授業料は心配いらぬよ。貯蓄は多少はあるわけだから」

「でも、それは今は使わない方が良くと思うわ。これからどうなるかまだわからないし。大学院に行きたかったのも、ただ勉強を続けたかっただけだし、勉強なら働きながら出来るわよ」

「由衣……」

父の申し訳なさそうな顔を見ると、由衣の胸も痛んだ。

「じゃあお母さんも働こうかしら。みんなで働けばきつと大丈夫よ」

由衣よりもさらにお嬢様育ちの母の言葉に、由衣と父は顔を見合わせた。そして三人でくすくすと笑う。もともと穏やかで呑気な一家だが、団結力も強かった。

「これで蓮くんとの婚約も解消だな……ごめん、由衣」

父がまた悲しそうな顔をする。笑ったり泣いたり、忙しい夜だ。

「蓮さんのことは、大丈夫よ」

そう口に出した由衣は、婚約者の顔を頭の中に思い浮かべた。いつも少し不機嫌そうで、それでもこれまで由衣が出会った誰よりも整った顔をしている男性。

竜崎蓮は由衣より三歳年上で、竜崎グループという巨大企業の跡取り息子だ。蓮の父親と由衣

の父親が友人同士で、ほとんどノリで婚約したようなものだった。

彼とのつきあいが始まったのは小学生の頃で、当時から婚約者らしい関係ではなかった気がする。まあ、小学生にどんな関係もないのだけだ。

三歳違いの異性の小学生同士が仲良くなれるはずはなく、どちらかという王様気質の蓮に、由衣は子分のように扱われていた。

そんな関係は、大人になった今でもあまり変わっていない。たまに会うことはあつたけれど、蓮が楽しそうにしていることはなかったし、彼もこの関係を良くは思っていないであろうことは薄々感じていた。

ただ、連絡だけは毎日するよう蓮から言われていて、お互いその日あつたことを日記のようなメッセージで送りあつていた。

そもそも、誰もが振り返るほどの容姿を持つ、大企業の御曹司である蓮と、お世辞にも美人とは言えない、中小企業の社長の娘では釣り合いが取れていないと自分でも感じていたし、周囲もそう思っていたらう。現に、過去何度かそういうことを言われていた。

蓮もこうなつたことを喜んでくれるかもしれない。

そう考えると少し残念な気もするけれど、仕方がないだろう。

由衣にはどうすることも出来ないのだ。

「大丈夫よ。きっとなんとかなるわ」

由衣がもう一度そう言うと、父の顔にまた笑みが戻つた。

## 2

慣れない引っ越し作業に多少は戸惑つたものの、三日後には父が見つけてきた古いマンションに移つた。前の家よりかなり狭いこともあつて、最低限の荷物だけを持ってきた。残りは倉庫に預けるものを除き、父が処分しようだ。

新居は前のような住宅街の中ではなく、高速道路が近くを走る川沿いにあつた。静かとは言いがたいが、家賃がお手頃だつたらしい。

2LDKのマンションはたしかに手狭だつたけれど、由衣が子どもの頃以来、久しぶりに親子三人で川の字になつて眠つたのはなんだか嬉しかった。

引っ越して数日後、由衣の父は再就職先に出勤した。昔からつきあいのある会社で、父のことを信じて雇ってくれたそうだ。父親は元々人当たりの良い人で、友人も多かった。それが功を奏したということだ。

結局なぜ会社を首になつたのか、具体的な理由が父の口から語られることはなかった。知りたと思う気持ちはたまらないほどあつたけれど、母も口を閉ざしている以上、由衣はなにも聞けない。元気に出勤する父を見送り、次は自分の番だと由衣は思った。

由衣には由衣で考えがあつた。聖女学院の学友の中には、会社経営者の娘が山ほどいる。そのコ

ネを辿って、どこかに雇ってもらおうと考えていた。けれどその考えは浅はかなもので、由衣の置かれていた状況が状況なだけにことごとく拒否された。犯罪者かもしれない親を持つ子どもは雇えないと言うのだ。

少し考えればわかりそうなことだが、それは由衣自身がこの状況をいまだちゃんと理解していないからかもしれない。

困ったことになったと思っただけれど、さすが聖女学院。そんな状況でもまったく躊躇せず手を差し伸べてくれた方がいた。麻生雛子、今は芳野雛子という方だ。

雛子は由衣よりも年上で、数多くの伝説を謳われる聖女の中で、良くも悪くもかなりの伝説を残された人だ。元々長く続く呉服屋のお嬢様で、現在は業界最大手の警備会社の社長夫人となっている。由衣の窮状をどこからか聞いた雛子が自ら連絡をくれ、夫の会社で雇ってくれるか相談してみると言ってくれたのだ。

由衣は藁をもすがる気持ちで履歴書と自己推薦書を書き、雛子に託した。

それから約一週間後、会社の人事から連絡があった。一般の新入社員に遅れること二週間、由衣は正式に芳野総合警備保障の総務課に籍を置くことが決まったのだ。

そんな感じで由衣の新しい生活が早速始まった。貯めてあったお小遣いで買った通勤服を着て、母親に見送られて家を出る。慣れない満員電車で気分が悪くなりつつも、なんとか耐えて会社の最寄り駅で降りた。

大勢の人が同じ方向に向かうその先には、巨大な建物があった。吉野総合警備保障の本社ビルだ。

入り口のセキュリティに真新しい社員証をかざして中に入り、面接の際に説明されたエレベーターに乗り、総務課がある階で降りる。由衣がドキドキしながら総務課のドアを開けると、すぐ近くに立っていた若い女性が振り返った。

「お、おはようございます。今日からお世話になります、鷹野由衣です」

由衣が大きな声で挨拶をすると、その女性がにこりと笑顔を向ける。

「おはようございます。飛鳥井環です。あなたの二年先輩になります。よろしくね」

「はい！ よろしくお願いたします」

由衣が深々とお辞儀をすると、環がくすくすと笑った。

「社長夫人のご学友だと聞いているわ。配慮は必要？」

面白がるような声に由衣は顔を上げ、そして首を少し傾げた。

「わたしは雛子様のご学友ではありません。ただの後輩です。わたしの窮状を助けてくださったという意味では、雛子様は恩人です。したがって、配慮は必要ありません。どんな配慮なのかは存じませんが……」

由衣がきつぱりと答えると、環はさらに面白そうな顔をした。

「それを聞いて安心したわ。どんなお嬢様が来るのかと、みんな戦々恐々としてたのよ。まあ、お嬢様には違いないんでしょうけど」

「あいにく、今はもうお嬢様ではありません」

「……あら」

由衣のあつけらかんとした言葉に、環はなんとも心配そうな顔になった。由衣の事情がある程度は知っているようだ。

由衣がこの状況に陥<sup>おち</sup>つてから、心配だと言いつつも好奇心を隠さない顔で見られることが何度もあった。そんな中で、本心から心配してくれたのは雛子だけだった。そして今日の前にいる環も、本当に心配してくれているように見える。

この人はきつと良い人だわ。

由衣はそう思い、内心でホッとした。

「とりあえず、課長のところに行きましょう。こっちよ」

「はい、ありがとうございます」

環に続いて部屋<sup>おとこ</sup>の奥へ進んだ。広い部屋の中にはたきさんの机が並んでいたけれど、人はほとんどいない。初日は少し早めに来るように言われたから、そのせいだろう。早くから仕事をしている人にべこべこ頭を下げながら、さらに奥に進む。そこには扉があり、環がノックすると中から声が聞こえた。

「鷹野さんが来られましたよ」

環がそう言って扉を開け、由衣を中に通した。そこにいたのは、由衣の面接に立ち会っていた総務課の課長だ。

「おはようございます。今日からお世話になります」

由衣が深々と頭を下げて挨拶<sup>あいさつ</sup>をする。

「おはようございます。こちらこそよろしくお願ひします。仕事については、その飛鳥井さんに任せているので、彼女になんでも聞いてください。困ったことがあればすぐに相談するように。しばらくは慣れないかもしれないけど、何事も経験です。焦らず頑張ってください」

「はい！ ありがとうございます」  
由衣はもう一度頭を下げた。

「じゃあ、行きましょ」

環に促<sup>うなが</sup>されて課長室を出た。また元来た場所に戻り、入り口の一番近くの机に案内される。

「ここが鷹野さんの机です。パソコンはあなた専用よ。使い方はわかる？」

「あ、はい。簡単な操作であれば」

「なら大丈夫ね。基本的に自分あての社内メールチェックくらいにしか使わないと思うわ。初期設定の説明書はここ、あとで自分で設定してね。それとタブレット。これも専用なので、同じように初期設定して」

「はー」

「あと、給湯室はあそこ」

環が通路の奥を指差した。

「自由に使って。共用の冷蔵庫もあります。名前を書いて入れておけば、取られたりしないわ。お昼にお湯を沸かしてカップ麺を食べる人もいるし、電子レンジもあるから、お弁当も温められるわよ」

「へえ、なんでもあるんですね」

由衣が感心したように呟く。

「まあね。あと、来客用のお茶のセットもあります。新人さんにお茶をお願いすることがあるから、その時はお願いね」

「はい」

「総務の仕事はいわゆるなんでも屋です。雑用も多いけど、それも仕事のひとつだと思って頑張つてね」

「はい」

「じゃあとりあえずパソコンとタブレットのセットアップから。終わった頃に他の人も来るだろうから、改めて紹介するわね」

「はい、ありがとうございます」

由衣は環にお礼を言って、ドキドキしながら自分の席についた。

白い事務机の上には、真新しいパソコンとキーボード、そしてタブレットが置かれていた。引き出しの中は空だ。すべて自分専用だと思つと、胸がわくわくしてくる。

タブレットの横に、ファイルに入ったマニュアルがあった。そこにはパソコンの電源の入れ方から、丁寧に書かれている。

由衣はパソコンの知識はそこそこあったので、難なく自分で設定することが出来た。

ちょうどその頃に、環の言葉通り他の社員たちが続々と出勤してきた。

由衣の席は入り口すぐの通路側なので、人が通るたびにペコペコお辞儀を続けていると、隣の席の環がクスクスと笑う。

「首が取れそうよ」

「は、はい、なんだか目眩めまがしそうです」

「あはは、あとでちゃんと紹介するから大丈夫よ。ほどほどでいいからね」

「ありがとうございます」

始業のチャイムらしき音が鳴ると、朝の朝礼が始まった。そこで課長から改めて由衣の紹介があった。一般の新入社員より入社が遅い件については、家庭の事情と説明される。まあその通りなので嘘ではない。

他の社員もその理由に納得しているようで、おおむね好意的に迎えてくれた。

朝礼が終わると、環が由衣に声を掛けてきた。

「じゃあ、次は社内を案内するわ。あ、タブレットも持つて」

言われた通りタブレットを小脇に抱え、ペンとメモ帳を持った由衣は環の後に続く。

総務課の部屋を出て、すぐ隣の扉の前に立つと、環が社員証を扉の横の装置にかざした。ピッと音がしたあと、環が扉を開けて由衣を中に入れた。

中には棚がびっしりと並んでいて、たくさんの荷物が収まっている。かなり広くて、一番端まで十メートル以上はありそうだ。

「ここは備品の保管庫よ。社内のあらゆる備品が揃っていて、総務課の社員証じゃないと開かない

の。備品がなくなるとそれぞれの部署から連絡が来るので、ここで準備して届けたりするのよ。ちなみに在庫管理はタブレットで操作してね。アプリを開いて、探してるものを検索すると、どこの棚にあるか教えてくれるから」

「すごい！ ハイテクなんですね」

感心したように由衣が言うのと、環も頷いた。

「このタブレットで結構なんでも出来るのよ。詳しい使い方はマニュアルにあるから、暇な時に読んでおいて」

「はい」

「じゃあ次ね」

倉庫を出て案内されたのは、女子更衣室だった。中は広くて清潔で、ロッカーとお化粧直しのための洗面台が置かれている。

奥にあるハンガーラックには、クリーニンゲ済みらしい服が何着も吊るされていた。

「うちは制服はないんだけど、正面玄関の受付をする時は制服に着替えることになってるの。その時はここで着替えるのよ。鷹野さんにもそのうちお願いすると思うから覚えておいて」

「はい」

「あとはそうね、社員食堂でも見に行く？」

「ぜひ」

環に案内されてエレベーターに乗り、社員食堂のある階で降りた。食堂は広くて、まるで巨大な

レストランのようだった。まだ朝なので人は少ないけれど、ところどころで食事をしている人がいる。

「うちは夜勤の人もいるから、その人たちのことも考えて、食堂は二十四時間開いてるのよ」

「へえ、すごいですね」

窓の外にはウッドデッキが見える。木や植物が植えられているそこにもテーブルと椅子があった。環に連れられて、そのデッキの真ん中に立って上を見上げた。

このビルはカタカナの口の字型になっていて、真ん中は上まで吹き抜けになっている。社員食堂の一部はその吹き抜けのテラス部分で、まるでおしゃれなカフェみたいだった。

「わー、これはすごいですねえ」

「でしょ。お昼はここで食べても良いし、外で買ってきて自分の席で食べても良いし、基本的に自由よ」

環の言葉の端々に、自社を誇らしく思う気持ちが込められているような気がした。

その後も環の案内で社内コンビニや誰でも使えるジムやプールを見学して、由衣は終始そのすごさに圧倒されていた。

この会社はすごい。業界最大手であるのももちろん知っていた。実際、社内の設備のどこを見てもすべてが素晴らしいし、働いている人の顔も、みんなやる気に満ちているようだ。

由衣は、自分の実力でこの会社に雇ってもらうことは無理だっただろうと、しみじみ実感する。

絶対に、雛子様の顔に泥を塗らないようにしよう。

由衣はそう強く思った。

総務課に戻ると、はじめての仕事を言い渡された。

「鷹野さんの初仕事は、部長と課長へのお茶だしよ。毎日するわけじゃなくて、新人さんの伝統行事みたいなものなの。挨拶みたいなもんね。もちろん男女関係ないからね。さつき説明した給湯室に揃ってるから。頑張ってみて！」

「はい！」

由衣は元氣よく返事をして、給湯室に向かった。そこにはさつき教えられた通り、お茶を淹れるための道具が一通り揃っていた。

まずやかんに水を入れて火にかけ、茶葉の入った袋をよく見る。一般的な煎茶のようだ。

「煎茶の淹れかたは……」

由衣は呟きながら目を閉じた。そして頭の中の百科事典をめくる。

由衣は昔から知りたがり屋だった。わからないことはすぐに調べ、知識を蓄えていくのが得意だった。それは一般的なことから、ちょっととした豆知識まで多岐にわたり、学生の頃はわからないことはなんでも由衣に聞けと言われたものだ。そして、ついたあだ名は『由衣ばあちゃんの知恵袋』。十代の少女につけるにしては微妙だったけど、言い得て妙だと由衣は思っていた。

煎茶のお湯の温度は七十度から八十度。由衣は沸騰したやかんの火を止め、二つの湯呑みに熱湯を注いだ。その間に急須に茶葉を適宜淹れ、お湯が冷めるのを待つ。

適温になったのを確認して、湯呑みのお湯を急須に移した。一分程度蒸らしてから湯呑みに注い

でいく。

煎茶の良い匂いがふわりと香る。

「うん、良い香り」

最後の一滴まで注いで、お盆に茶托を置き、湯呑みをそっと載せた。

「よし」

お盆を持ち上げ、いざ給湯室を出ようとしたところで、バツと扉が開いた。由衣がびっくりして振り返ると、環が同じように驚いた顔で立っていた。

「わ！ ごめん、ずいぶん遅いから倒れてるのかと……」

「すみません。そんなに遅かったですか？」

「うん、まあね」

苦笑いの環に付き添われ、湯呑みの載ったお盆を持って課長室に向かった。

「失礼します」

ノックをして扉を開けると、課長とそして部長が座っていた。部長も面接の時に一度会っていた。

「遅くなりまして申し訳ありません」

言いながら由衣が湯呑みを二人の前に置いた。

「使い勝手がわからなかったかな？」

課長が苦笑いを浮かべながら言う。

「あ、いえ、そういうわけでは……」

由衣がそう答えた時、お茶を一口飲んだ部長が、ほうつと声を上げた。

「美味しいな。新しいお茶かい？」

「え。いえ、いつものやつですよ」

由衣の後ろに立っていた環が驚いたように答える。

「どれどれ」

課長も興味深そうに言い、お茶を飲んで、そして同じように声を上げた。

「本当だ。これは美味しい」

「鷹野さんは、お茶を淹れるのが随分お上手だね」

部長にそう言われて、由衣はホツとした。

「ありがとうございます。お茶の淹れ方は一通り学校で習ったので。もっと美味しく淹れたくて、自分でもいろいろ調べたりしました。ポイントはお湯の温度で、一番重要なんです」

由衣は知らずに力説していたけれど、部長たちが苦笑いを浮かべたのを見て、思わず口を閉じた。「出来上がりは申し分ないが、次はもう少し時間を短縮出来るように頑張ってみて」

「は、はい。失礼しました」

若干しょんぼりとして課長室を出ると、環がポンと肩を叩いた。

「別にたいした失敗じゃないんだから、気にしないで」

「……はい」

「結果、お茶は美味しかったし、怪我もなくて良かったわ」

環がホツとした顔で笑ったのが、なんだか気に掛かる。

「怪我だなんて……」

「あら。あなたの先輩である社長の奥さんなんて、会社でお茶を淹れるたびに、湯呑みを割ったり火傷したりボヤを出したりしたわよ」

「ボヤ……」

「毎回警報器とかスプリンクラーが作動するので、見かねた社長がとうとう社長室での飲食禁止令を出したの。警備会社の社長室でボヤ騒ぎだなんて、洒落にもならないものね」

「そう、ですね……」

「社長夫人にはこれ以外にも面白い話がたくさんあってね。お仲間だつて聞いたから、どうしようかと思っていたけど、良かったわ」

環があっけらかんと笑った。

さすがは雛子様。学院のみならず、大人になっても数々の逸話を残されているとは。

笑うに笑えないまま、由衣は給湯室にお盆を戻しに行く。

「さ、じゃあ次は、経理と営業に備品を届けに行きましょ」

「はい」

由衣はその後環からいろいろと仕事を教わった。はじめてのことばかりで戸惑ったり失敗したりしたけれど、なにもかもが興味深い。

そうして慌ただしく過ごしているうちに、あつという間に終業時間になっていた。

「お疲れさまでした。今日はこれで終わりです。どうだった？」

「ありがとうございます。なにがなんだか……という感じです」

由衣が正直に答えると、環が笑った。

「最初だからね。誰でもそういうものよ。そのうち慣れるから少しずつ覚えていって」  
「はい」

由衣は帰り支度をしたあと、環や同僚と一緒に駅に向かって歩く。気さくな性格の環と一日一緒にいて、由衣は頼れるお姉さんが出来たような気持ちになっていた。環のおかげで他の同僚とも親しく話せるようになり、一日でたくさんの知り合いが出来たことも嬉しい。

改札口で環と別れ、由衣は一人でまた満員電車に乗った。朝とはまた違う雰囲気、圧倒されながら、なんとか踏ん張ってつり革に掴まる。

丸一日働いて、猛烈に疲れていた。気力も体力もすべて使い果たした——そんな感じだ。

電車の窓には、ぐったりと疲れている自分の顔が映っている。よく見れば、まわりにいる人たちも同じような顔をしている。

みんなそうやって、一日一生懸命働いて、そして疲れて帰って行くのだ。

由衣は改めて、自身が今までとても恵まれた環境にいたことを実感する。

電車を降りて自宅まで歩く。それほど遠くはないはずだけれど、今日は足が棒のようになって、いつもよりも遠い気がした。気を抜けば倒れそうだと思いつつ、マンションを目指す。

「ただいまー」

「おかえりなさい」

玄関を開けると、すぐに母親が迎えに出てきた。

「疲れたでしょ。お父さんももう帰ってくるから、すぐご飯にしましょう」

母の明るい声が心に染みわたる。思わず涙が出そうになって、慌てて顔を隠す。

「じゃあちよつと着替えてくるね」

玄関のすぐ横にある由衣の部屋にさっと入り、電気をつける。以前の家に比べると今の部屋は狭く、ベッドと本棚だけでいっぱいいだ。

滲んだ涙を手でぬぐい、ふうと息を吐く。まるでホームシックになったような感覚だった。

しっかりとしなければ。もう甘えた学生ではないのだから。

部屋着に着替えて部屋を出ると、ちょうど父が帰ってきた。

「おかえりなさい」

「ただいま。由衣はどうだった？」

「大変だった。でも、楽しかったわ」

「そうか、それはよかった」

父は由衣の少し赤い目に気がついていたらかもしれないけれど、それには触れずにこりと笑った。

三人で食卓を囲み、今日あったことを報告しあった。由衣が失敗したことを語ると、自分もそうだったと、父が若い頃のものからつい最近の失敗まで、面白おかしく話してくれた。

「失敗は誰にでもある。大切なのはそのあとだよ」

「そうね。明日は同じ失敗をしないように頑張るわ」

「お父さんも由衣も頑張ってるんだから、わたしも頑張らないと」

母が言い、三人でまた笑った。

母のこの台詞の本当の意味がわかったのは数日後のこと。由衣が知る限り働いたことのない母だったが、この後すぐに近所のスーパーのレジの仕事を見つけたのだ。

こうして本当の意味で、家族三人の新しい生活が始まった。

明日への期待と不安と、そして心地よい疲れに、由衣はベッドに入るなり、すぐに眠たくなった。

……なにか、忘れていたような気がする。

ふと思ひ浮かんだけれど、答えを見つげる前に由衣は眠りの中に落ちてしまった。

## 3

竜崎蓮は激怒していた。

理由は一つ、婚約者が連絡を寄越さないからだ。

「あれほど毎日連絡しろと約束したのに」

空港の到着ロビーを出て、出迎えの人混みの中にその姿が見えないことも、蓮の怒りを増幅させていた。

百人いれば百人が美しいと言うほど、蓮の姿は整っていた。現に今も、すれ違う女性たちの視線を集めているけれど、当の本人はまったく気にしていない。

現在二十五歳。建設業からはじまり、今ではあらゆる分野で利益を上げている竜崎グループの御曹司で、将来は現会長の父親の跡を継ぐことが決まっていた。現在はいわゆる武者修行中で、あちこちのグループ傘下の会社を駆けまわっている。つい先日まで、スマートフォンも電波も届かない、ジャングルの奥地のダム建設に関わっていた。来週からは竜崎の本社に戻り、公共事業の開発工事に携わる予定だ。

そんな多忙な蓮には親同士が決めた婚約者がいる。はじめて会った時、お互いまだ小学生だった。婚約者の父親はIT企業の大先輩と呼ばれる会社を一代で大きくした人で、蓮の父親の友人だ。

婚約者と言われても当時はピンと来なかったけれど、三歳年下の婚約者は素直な性格で、蓮の言うことをなんでも聞いてくれたので、体の良い子分のような関係だった。

そんな関係も年々変化し、お互いがスマートフォンを持つ頃には、毎日連絡を取るようになっていた。以来、婚約者からは給食のメニューや宿題の内容といった、まるで一言日記のようなメッセージが毎日届いている。まあ当時は中高生だったので、他に書くことがなかったのだろう。

ちなみに蓮も自分の給食や宿題を送っていて、こっちの方が美味そうだとか、自分の方が難しいことを習っているだとか返事をしていた。

そんなに頻繁に会うような関係ではなかったけれど、一か月に一度程度は顔を合わせて食事には行っている。今から約三か月前、ジャングルの奥地に赴く前にも食事をして、一日一回はメッセージ

ジを入れることを約束していた。蓮からの返事は毎日出来ないかもしれないが、出来る範囲で連絡すると伝えていたのだ。

蓮が帰る日程も、秘書に聞けばすぐにわかると言っていたのに。

なのに、婚約者である鷹野由衣からの連絡は約二か月前から途切れていた。

「蓮さん、おかえりなさい」

掛けられた声に蓮は振り向いた。

そこに立っていたのは蓮の側近の犬飼いぬかいだった。

蓮は黙ったまま頷ぎ、押していた荷物のカートを犬飼に託す。

蓮の専属秘書は犬飼の他に、鹿野内かのうちという者がいる。

犬飼は蓮よりも十歳年上の有能な男で、元々は蓮の父親の秘書をしていた。その後は蓮の秘書となり、蓮のスケジュールのすべてを管理している。

もう一人の鹿野内は、蓮の幼馴染わらわななじみで親友でもある男だ。小中高大と同じ学校に通い、気心も知れている。加えて武道の有段者ということもあり、蓮が入社する時に秘書兼ボディガードとして一緒に来てもらった。

仕事の際は必ず二人、もしくはどちらかと一緒にいるが、今回の海外出張は珍しく一人だった。だから日々のことにはいっばいっばいで、婚約者のことまで頭が回らなかったのだ。

迎えの車に乗り込むと、運転席には鹿野内が座っていた。

「おかえり。向こうはどうだった？」

鹿野内が明るく声を掛けたけれど、蓮の不機嫌そうな顔を見て黙り込んだ。

「蓮さん、お疲れですか？」

犬飼が探るように尋ねると、蓮の眉間のしわがさらに深くなった。

「……由衣はどうしてる？」

蓮が聞くと、二人は顔を見合わせ、そして恐る恐るの様子で蓮を見た。

これは怒っている。

二人はまた目を見合わせ、やがて犬飼がそつと口を開いた。

「……会長から聞いてませんか？」

「父から？ なにをだ？」

これまで由衣とのことに父親から口を出されたことはない。

蓮が答えると、二人はまた顔を見合わせた。

車が発進し、少し落ち着いた時に二人から知らされた内容に、蓮は驚くほどの衝撃を受けた。

「由衣の父が背任行為で会社を追いつけられた？ そんなばかな」

由衣の父親のことは、蓮が子どもの頃から知っていた。仕事熱心で性格は穏やか、一見人がよさそう。だがずば抜けた経営能力を持っていて、一代で築き上げた自分の会社をさらに発展させることだけを考えているような人だ。それも正攻法で。だから犯罪とは縁遠い人だと思っていた。

「その辺りの事情はちよつと微妙なんですよ。はっきりした理由は公おおやけにされていないようです。

噂では会社の機密情報を流出させたとか」

犬飼の言葉に、蓮は眉をひそめる。

「それと、由衣が連絡してこないことになんの関係がある？」

父親が大変になったからといって、まったく連絡しない理由にはならない。むしろ連絡してくるべきだろう。

すると、犬飼が言い難そうに口を開いた。

「それはですね。鷹野社長が……あ、鷹野氏は会社を追い出され、一家は引越されました。鷹野氏の資産のほとんどは株だったので、それも大事にしないことを条件に譲渡することになったようです。で、多分由衣さんのスマホなども全部解約されたんでしょう。それで先日、鷹野氏が来られて、迷惑がかかるので婚約を解消すると……」

「解消……？」

蓮が静かな声で言った。

「はい、向こうからそう申し入れがあったと。詳しいことは御父上からお話があると思いますので、このままご実家に向かいます」

それ以上はわかりませんと犬飼も鹿野内も逃げるように言い、蓮の怒りがただただ増す。

家に着くまでの車の中で今回の出張の報告書を書こうと思っていただけ、まったく手につかない。

タブレットの電源を切り、窓の外を見ながら、蓮は由衣のことを思い出していた。

一言で言うと、真面目な女性だった。特別美人ではないけれど、そこそこ整った顔をしている。

お嬢様学校として名高い聖女学院に長年通っていることもあって、どこか浮世離れしている雰囲気もある。蓮の言うことにはなんでも素直に答えてくれ、わからないことがあった時はすぐさま学習して吸収することも得意な女性だ。勉強も良くでき、学院でも成績優秀者として何度も表彰されていて、蓮も誇らしく思っていた。

とはいえ、蓮が由衣のことを婚約者としてちゃんと意識し出したのは最近のことだ。子どもの頃の婚約など、はつきり言っていないに等しい。自分たちの場合、父親たちの友情が理由だからなおさらだ。

だから、蓮はその関係は長続きしないと置いていたし、結婚する気もまったくなかった。もちろん由衣本人には言わなかったが、別の女性とつきあってみたり、そこそこ遊んだりしていたくらいだ。

ただ、皮肉なことにそういった経験を重ねるにつれ、だんだんと由衣の良さがわかってきた。他の女性と比べれば比べるほど、由衣のそばにいたことの方が心地よいと思ってしまったのだ。

気づいてしまえば、蓮の行動は早い。将来の伴侶は由衣しかいないと確信したからこそ、仕事に精進して早く一人前として認めてもらおうと努力している最中だった。

それなのに……

突然のこの展開に、蓮の怒りがまた沸々と湧いてきた。

自宅に到着し、鹿野内が車のドアを開けるなり、蓮は飛び出すように降りて父親のもとに向かう。

「おお、戻ったのか」

リビングにいた父親が蓮を見て声を掛けた。

「お父さん、どういことですか？」

蓮が厳しい顔で問い詰めると、父親が首を傾げた。

「どういうって、なんだ？」

父親が戸惑うように言ったのとほぼ同時に、母親もやって来る。

「由衣のことです」

蓮がはつきり言うとき、父がああど咄き、悲しそうな顔をした。

「犬飼たちから聞いたか？」

「結果だけ。詳しい話はお父さんからと」

蓮が答えると、父親が頷いた。

「詳しくもなにも、肝心の鷹野本人がほとんどなにも話さないから、わたしだってわからんよ。たしかなのは、鷹野が会社を追われ、財産もほぼなくなったことだな。で、迷惑をかけるから、婚約を解消すると言われたよ。そもそもわたしたちが勝手に決めたことだが、今は一応公になつてい

るからな。まして、由衣さんに無理強いは出来ないだろう」

父は残念そうに言ったけれど、蓮はまったく納得出来なかった。

「お父さんは、本当に鷹野氏が背任行為をしたと思ってるんですか」

「いや。そういうことから一番遠い人間だと思っっているさ」

「なら、どうして動かないんですか!？」

「動くもなにも、鷹野がなにも言わない以上、他社の事情に踏み込むわけにはいかん」

父親がはつきりと答えると、蓮が苦い顔になる。

「だからって勝手に解消なんて。由衣は俺の婚約者なのだから、俺が動きまます！」

蓮は断言するようにそう言うと、すぐに家を出て行った。そのあとを、犬飼と鹿野内が追いかける。

慌ただしく出ていく一同を見ながら、蓮の両親は半ばあつけにとられていた。

「蓮があんなことを言うとは意外だったな。由衣さんには興味がないと思っっていたよ」

「本当に。そんなに由衣さんのことが好きだったなんて思わなかったわね。我が子ながら、わかりにくい……」

父親も母親も呆れながら言う。

「まあ、それならそれで良い。自分で動こうかと思っっていたが、蓮に任せる方が良いだろう」

「そうね。なんとかなると良いけど……」

敷地から出ていく車を見送りながら、二人はまた顔を見合わせた。

蓮は一人暮らしをしているマンションに帰るなり、すぐさま情報を集める。

由衣の父親のことはニュースサイトに小さく取り上げられていた。たしかにそこに情報流出の文字があったけれど、それ以上のことはわからない。

「もっとちゃんとした情報を集めてくれ」

荷物の整理をしていた側近らに声を掛けると、二人はすぐさま頷いた。

「由衣はたしか大学院か。もう授業はとづくに終わったか？」

呟きながら時計を見ようとすると、犬飼が答えた。

「由衣さんは大学院には行っていませんよ」

「……なに？」

「進学はあきらめられたそうです。先日、鷹野氏が来られた時にそうおっしゃってました。就職されることになったとか」

蓮は由衣がとにかく勉強が好きだったことを知っている。だから、大学卒業後に大学院へ進むことを勧めたのは蓮だった。

——大学院で勉強漬けにしてあげば、余計な虫が寄ってくることはないと思っていたのも事実だった。

由衣の心情を思うと、蓮の胸も痛くなった。大学院に行くことを由衣は楽しみにしていたのだ。

「どこで働いている？」

「たしか、芳野総合警備保障です」

「芳野？ なぜそこに？」

「由衣さんと芳野の社長夫人がご学友だそうですよ」

なるほど。その繋がりか。

とにもかくにも、まず由衣と会って安否を確認しなければ。もう三か月以上顔も見えていなければ、

声も聞いていない。

だが、新しいスマートフォン番号も家の場所もわからない今、蓮が取るべき行動は一つだった。

「明日、すぐ芳野に行く。スケジュールを調整してくれ」

「は、はい」

驚いて目を丸くした側近を横目で見つつ、蓮は大きなため息をついた。

#### 4

由衣が働き出してから一週間が過ぎた。毎日のはじめてのことばかりで緊張した日々だったけれど、少しずつ仕事が出来るようになり、充実している。

満員電車にも慣れ、これまでほぼ女性しかまわりにいない環境だったけれど、男性社員らと一緒に働くことに違和感を覚えることがなくなった。

働いてみて、由衣は改めて自分が狭い世界で生きてきたことを実感した。知識だけ豊富でも、実体験を伴わなくては意味がないのだと知った日々だった。

「由衣、ホームページの問い合わせメールなんだけど、部署別に仕分けして担当者に送っておいて。回答の締め切りは明日だから、それも伝えて」

「あ、はい」

環から言われた通り、由衣は自分のパソコンを立ち上げ処理をする。

由衣の教育係である飛鳥井環とはかなり親しくなっていた。一人っ子の由衣にとって、頼れる姉のような存在だ。

総務の仕事は幅広くて覚えることも多いけれど、今はだいぶ簡略化され、専門的な知識がなくてもある程度はすぐに出来るようになってきているそうだ。新しい知識がどんどん増えていくことが、由衣は楽しくて仕方なかった。

「それが終わったら、支店の資料まとめもお願い」

「はい」

仕事は次々あって、忙しい時は本当に忙しい。

由衣は急いで各部にメールを送り、全国の支店から送られてきた山積みの段ボールに手をかけた。その時、別の手が伸びてきて段ボールを持ち上げた。

「環ったら人使いが荒いわよねえ。手伝うわよ」

声を掛けてくれたのは別の先輩社員だ。

「ありがとうございます」

「あら、わたしだつて手伝うわよ、もちろん。これが終わったらだけど」

環がキーボードをカタカタ鳴らしながら言う。環も仕事如山積みなのだ。

「さっさとやんなさいよ。お昼までに終わらせて、みんなでランチに行くんだから。環だけ置いてくわよ」

「やだ、わたしだつてみんなとランチしたい！ 由衣だつて一緒に良いわよね!？」

「はい、もちろん」

「ほら！ 聞いた？」

言いながらも、環のタイピングのスピードは変わらない。それを由衣は尊敬のまなざしで見つめる。

「聞いているわよ。由衣ったら優しいんだから。じゃあこつちも人海戦術でやるわよ」

先輩はそう言い、他の人を何人も呼んで全員で資料を整理した。一人でやる作業も、みんなでわいわいやる作業も、由衣にとってはやっぱり楽しいことだ。

その日、環の仕事も無事にお昼までに終わり、みんなでランチを食べに行つた。

職場の同僚は良い人ばかりで、新しい生活は想像していたよりずっと楽しい。

そんなある日、由衣がコピー機の前で説明書を読み込んでいると、社内がなにやらざわついた気がした。なんだと顔を上げた時、環がこちらに向かって歩いてくるのが見えた。

「由衣、お客さんよ」

「え、わたしにですか？」

「そう。ここは良いから行って。課長の許可は取ったから」

「は、い……」

お客さんって、誰かしら？

由衣は戸惑いながら、説明書を置いて指定された会議スペースに向かった。そこは総務課の出入

り口の近くで、パーティーションで区切られただけの小さな部屋だ。

「失礼します」

恐る恐る声を掛けて扉を開ける。その真正面に座っている人物を見て、由衣は思わず目を丸くした。

「まあ、蓮さん！」

そこにいたのは竜崎蓮だった。

相変わらず驚くほど整った顔をしている。その表情はいつも自信に満ちていて、狭い会議室のパイプ椅子に座っているのに、まるで王様のように堂々としている。

ただ、今日はその眉間に深いしわが寄っていた。

顔を見るのは随分久しぶりだと思った瞬間、由衣はその理由に気づいた。

「そういえば、出張に行っていたんだっけ。帰ってきたのね、おかえりなさい」

由衣がそう言うと、そのしわが一層深くなる。

「ただいま……じゃない。どういふことだ？」

怒りを含んだ蓮の声に、由衣は戸惑った。

どういふって、なんのことだろう。思い当たるのは婚約解消のことだけだ。

「どういふって……聞いてない？ 婚約解消のこと」

由衣が尋ねると、蓮の顔がさらに険しくなる。

「聞いている」

「じゃあ……」

なんのこと？ と聞こうとしたところで、蓮が大きな声で言った。

「そういうことじゃない。なぜ連絡を寄越さない！ 毎日必ず連絡すると約束したじゃないか。スマホを解約したとはいえ、手段はいくらでもあるだろう!？」

由衣は蓮がなにを言っているのか、理解するまで少し時間がかかってしまった。

連絡しなかったことを怒っているとは、考えもなかったのだ。でも、連絡をしなかった理由は、やっぱり一つしかない。

「なぜって……婚約解消したから？」

由衣はまた恐る恐る答える。

「してない」

「え？」

「婚約は解消してない」

蓮がきっぱりと言った。

「そうなの？ お父さんはお断りしに行っちゃって言ってたけど……」

「勝手に解消されては困る」

蓮の毅然とした態度を見て、由衣の父親が言ったことは幻だったのだろうかと思わず一瞬考えてしまった。

「でも、蓮さんたちにもご迷惑をかけることになるし……」

「なにが迷惑かは俺が決める」

「……はあ」

蓮の勢いに押され、由衣はそれ以上なにも言えなかった。そもそも父親がなぜ会社を追い出されたのか、具体的な理由がわからない以上、こちらも反論も出来ない。でもそれ以上に、今までとまったく変わらない蓮の態度が嬉しかった。

父親の事件があつてから、由衣の人間関係はがらりと変わった。事情もなにも知らない人たちが、こぞって背中を向けたのだ。そんな中で手を差し伸べてくれたのは雛子様。変わらずにいてくれたのは、蓮だった。

「新しい連絡先は？」

蓮の気迫に押され、由衣は覚えたてのスマートフォンの番号を答えていた。答えた直後に後悔したけれど、今後のことを考えると連絡先くらいは知っていた方が良いだろうと思ひ直す。

蓮はスーツの胸ポケットから自分のスマートフォンを取り出すと、その番号に電話をかけてすぐに切った。

「ちゃんと登録しておけよ。そして毎日連絡するように」

「わかったわ」

由衣が素直に頷くと、ようやく蓮の眉間のしわが消えた。そして満足したように頷くと、テーブルの下から紙袋を取り出し、由衣に渡した。

「土産だ」

「まあ。ありがとう」

異国の香りがする紙袋を由衣が受け取ると、蓮は立ち上がって出入り口に向かった。

「ではまた」

「はい」

戸口まで見送ると、そこに蓮の側近がいた。いつも一緒にいる犬飼という人だ。

由衣が会釈をすると、犬飼も一礼して蓮の後に続く。姿が見えなくなるのを待つて、由衣は紙袋の中を覗いた。

そこには木彫りの人形のようなものが入っていた。カラフルに色が塗られたそれがなにかはよくわからない。

由衣がその人形もどきを取り出したところへ、環が顔を出した。

「大丈夫？」

心配で見に来た様子の環は、由衣が笑顔だったので、拍子抜けしたようだった。

「誰だったの？ 随分イケメンくんだったけど。なんだか、まわりがものすごく騒がしかったし」

「元婚約者……のはずなんですけど、なんだかまだよくわからなくて」

答える由衣も曖昧だ。

「なによそれ？ そして、なにそれ。怖っ」

環が由衣が持っていた人形を指さして震える。

「お土産ですって」

「どこの土産よ。呪いの人形みたいじゃない」

言われてみれば、たしかにそんな感じだ。

「蓮さんは、いつも変わったものをくれるんです」

由衣は答えながら、口元を綻ほころばせた。

そう、蓮はいつも珍しいものの、由衣が知らないものをくれる。そして、それがなにかを調べることが、由衣の楽しみでもあった。

蓮は由衣のことを誰よりも理解している。

——そうだった。蓮さんはそんな人だ。

嬉しくなると同時に、解消したはずの婚約が継続しているらしいことに、由衣は困惑していた。

どうやら蓮は、婚約解消をよく思っていないようだ。

これまで熱心につきあってきたわけでもないし、今の由衣と関わっても、デメリットしかないはずなのに。

それでも婚約を続けようとする蓮の気持ちが、由衣にはわからなかった。

竜崎という大きな名前を持つ彼の生涯の伴侶となれば、それなりの資質を求められる。そんな蓮の隣に立ちたいと思う女性はたくさんいる。由衣よりももっと相応ふさわしい女性が、必ずいる。

そう考えた途端、由衣の胸がチクツと痛んだ気がした。

複雑な気持ちのまま仕事に戻ると、今度は課長に呼ばれた。蓮からもらった紙袋を自分の机の引き出しに仕舞い、由衣は課長室へ急いだ。

「失礼します！」

声を掛けて中に入ると、課長が慌てた様子で電話を切ったところだった。

「鷹野さん、竜崎の御曹司とはどういう……」

関係か？ と聞いているのだろうか。

竜崎グループは、この会社ともかなり取引があるのだろう。蓮は現会長の一人息子で、跡を継ぐことが確実だ。だから竜崎蓮の名前は、経済界では広く知れ渡っている。

由衣はそういうことには無頓着だったけれど、度々忠告してくる人がいたので状況は理解していた。なので、今課長が戸惑っていることも十分理解出来た。

「竜崎蓮さんとは、子どもの頃から最近まで婚約関係にありました。父の件があって、それは解消されたと思っただけなんです……」

由衣も言葉を濁にごす。解消されたはずの婚約が実はそうではないようだということに、一番戸惑っているのは由衣だからだ。

課長は困惑しながらも頷く。

由衣の家庭の事情を会社は把握しているし、すべて了承済みで雇ってくれているのだ。

「向こうは君を婚約者だとはつきり言ったよ」

「まあ、蓮さんが？」

「確認出来れば良いんだ。ありがとう。仕事に戻って」

「はい……」

なにが良いんだか、由衣にはさっぱりわからなかったけれど、促されるままに部屋を出た。コピー機の前に戻り、また説明書を眺めるものの、さっきよりも頭に入っていない。まだ混乱していた。

確認したいのはわたしの方だ。

由衣はそう思いながら、今すぐ父親に連絡したい気持ちを抑え、コピーの続きをはじめた。

由衣は結局もやもやしたまま仕事を終えた。環が詳しい話を聞きたがったけれど、課長に話したのと同じことしか言えなかった。環には改めてちゃんと説明すると約束して、由衣は家に帰るなり父親に今日の話を話した。

「ちゃんと解消を申し入れたんだけどな……」

話を聞いた父親も不思議顔だ。

改めて聞いてみるよと父に言われ、とりあえず由衣も引き下がった。

自室に戻り、蓮からももらったお土産を取り出した。

木彫りのカラフルな置物。人の形にも見えるし、動物のようにも見える。

蓮は地方や海外に行った時は、必ずと言って良いほど由衣に珍しいお土産をくれた。それらほども由衣の大切な宝物になっていて、引越した時も捨てずに持ってきていた。

「蓮さん、今回はジャングルの奥地に出張って言ってたっけ？」

となるとやはり、お守りの類いなのかもしれない。

スマホで調べると、ペルーやボリビアのエケコ人形に近い気がする。

「図書館で調べられるかしら？」

好奇心を膨らませたままベッドに入った由衣は、改めて蓮のことを思い出した。

驚くほど整った顔は、今思い出せば少し日焼けしていたようだ。それに以前よりも痩せていたような気がする。過酷な仕事だったのだろうか。

今回は何か月も会わないままだった。婚約してから、こんなに長期間顔を合わせなかったことはなかった気がする。なんだかんだ言って、たびたび会っていたのだと気づく。

由衣は、自分が思っていた以上に蓮との距離が近かったことを改めて実感した。今のこの部屋だつて、蓮からももらったものがたくさん置いてあるのに。

そういえば、蓮に劣いという言葉一つかけていなかった。

「あ。連絡しないと」

思い出して慌てて飛び起き、スマホを手に取ると、蓮からの着信番号を登録して、ショートメッセージを送った。

『蓮さん、こんばんは。改めて出張お疲れさまでした。お土産もありがとう。おやすみなさい』

いろいろ考えたけれど、結局今までと同じようなメッセージを送った。

数分後に蓮から返事が来た。

『困ったことがあればすぐに連絡するように。おやすみ』

素っ気なさはお互い様だ。

由衣はいつもと変わらないそのメッセージに笑みを浮かべ、改めてベッドに入って布団を被った。

蓮はすつきりとした気分で、芳野総合警備保障の総務課を後にした。婚約者でもある由衣の顔を見られて、無事を確認出来たことも良かったし、言いたいことも言えたからだ。

そこに辿り着くまでにいろいろあったので、感慨もひとしおだ。

蓮は自分の立場をよく理解している。だからこそ、アポイントなしで由衣に会いに行った。当然だけれど受付ですったもんだあり、それを押しきる形で由衣に面会を求めた。ここでも竜崎の名は強い。

由衣に土産を渡せたことも満足だった。由衣の知的好奇心を満たすため、いつも土産選びには細心の注意を払っている。

紙袋の中身を見た由衣の顔を思い出し、蓮はまた満足げな顔をした。

「蓮さん、芳野社長がお会いしたいとのことです」

犬飼にそう言われたのは、玄関ロビーに降りてきた時だった。視線の先には数人の男が立っている。芳野社長の秘書たちだ。

「竜崎様。お忙しいところ申し訳ありませんが、社長がご挨拶したいと……」

「わかりました」

受付で竜崎の名前を出した時点で、こうなることは予想済みだった。

蓮は頷いて秘書のあとに続く。

芳野の社長室は最上階にあった。最大手の警備会社らしく、ビル全体のセキュリティはかなり厳重だ。ここなら由衣も安全だろうと思いつながら、社長室に入る。

すると、奥に座っていた男が立ち上がった。背が高く、がっちりとした体格と彫りの深い顔立ち。目つきは鋭く、視線だけで人が殺せそうだと蓮は思った。

たしか芳野社長はスイス人とのハーフで元軍人だったはず。

蓮は由衣の就職先を知った時、いろいろ調べたことを思い出した。

「ようこそ。竜崎さん。わざわざお越しいただいて申し訳ありません」

流暢な日本語でそう言うと、芳野社長は蓮にソファに座るように促した。

蓮が座ると、犬飼がその後ろに立った。すぐさまコーヒーマグが運ばれ、テーブルの上に置かれると、芳野社長が目の前にゆっくりと座った。

なるほど、貫禄があるな。

芳野社長を真っ正面から見つめて、蓮はそう思った。

「うちの社員となかごさいましたか？」

唐突に芳野社長が言った。

うちの社員とは、由衣のことだろう。

由衣に会うために、蓮は受付に呼ばれて文字通り飛んできた総務部の課長に、自分は由衣の婚約者であることを告げている。その報告を社長が受けていないはずはないだろう。

「あれはわたしの婚約者です。事情があつて連絡が取れなかったため、押し掛けるような形になつてしまい、申し訳ありません」

頭を下げる蓮を見ても、芳野社長は表情を変えなかった。蓮がちつとも申し訳ないと思つていないことを理解しているようだ。

ただ、報告が嘘ではないことは彼もわかっているだろう。この社長がやり手であることは知っている。蓮が由衣と面会している間に、あらゆることの裏付けは取つたはずだ。

蓮は由衣が職探しのために奔走したことも聞いていた。父親の件で難儀していたところ、芳野社長の妻である学院の先輩が口利きをしてくれたことも。

芳野社長の愛妻家ぶりは大変有名だ。可愛らしい妻が涙ながらに頼めば、否とは言えない。だからこそ慎重に由衣のことを調査しただろう。悪意のある者が妻を騙しているかもしれないと心配するのは当然だ。

由衣の評価を蓮は正確に理解している。どこから調べてもなんの落ち度はない。家柄も申し分ないし、品行方正で学院の成績はかなり優秀だ。一番の問題は父親の件だが、あれも少し調べればその異常さに気づくはず。そうなれば、由衣を断る理由はない。

芳野は大会社だが、話に聞く限り、个性的と云うには憚られるような人材が多数働いている。由衣のような真面目で問題を起こさないタイプはありがたいだろう。

蓮はそこまで考えていた。

だが真面目な彼女の婚約者である自分が、こんな行動に出ることは、芳野社長にとっては想定外だつたに違いない。

芳野社長が内心でため息をついていることを面白く思いながら、蓮は表情を変えずに彼を見つめた。

由衣の調書には蓮の名前もあつたはずだ。竜崎グループは西城グループと並ぶ大企業。関わりを持つことは悪くないと、その点も見越して由衣の入社を認めたのではないか。ここで竜崎に恩を売るのはある意味良いチャンスだ。蓮が彼の立場なら、間違いなくそうする。

「なるほど。では丁重に扱います」

芳野社長がそう言うと、蓮は眉を少し上げた。

「過大な配慮は必要ありません。普通の社員と同様に扱ってください」

もし過度の配慮なんてされたら、由衣からなにか言われるのは自分だと蓮はわかっている。

今度は芳野社長が眉を上げ、そして安堵したような顔をした。とんでもない要求をされると思つていたのかもしれない。

「わかりました。ではそのように」

芳野社長の言葉に、蓮は深く頷いた。

竜崎に恩を売ったことに芳野社長は満足し、由衣が安全な環境にいることに蓮も満足する。

お互いに内心を見せず握手をして、蓮は社長室をあとにした。

今ごろ、芳野社長は今後のことを協議していることだろう。由衣が竜崎と関わりがある以上、いくら普通にしろと言ってもそういうわけにはいかないことは、お互いにわかっている。

今後、芳野になにかお返しをしなければいけない。

駐車場に止めた車に乗り込んだところで、運転席の鹿野内が口を開いた。

「由衣さんとちゃんと話は出来たか？」

「ああ、言いたいことは言ってきたからな。これで婚約解消はなしだ」

蓮は先程した会話を側近二人に話して聞かせた。

「由衣も納得しただろう」

自信満々に答える蓮に、犬飼がなんとも言えない視線を向けた。

「それはなんにも伝わってないと思いますよ」

「どうしてだ!？」

「だって、なんの説明もしてないじゃないですか？」

「……」

蓮が黙り込む。たしかに、具体的な説明はしていなかったかもしれない。だが説明と言っても、なにをどう説明するのか。

「俺が、解消しないと云ってるんだ」

蓮が絞り出すように言い切る。

有言実行タイプの蓮の言葉に偽りはない。これまでもそうだったし、これからもそうだ。だから、蓮が言えば必ずそうなる。

「結果的にはそうですけどね」

蓮は呆れ声の犬飼を後ろから睨む。

せつかくの上機嫌が台無しじゃないか。

しかし、由衣が納得していないなら、それは問題だ。さて、どうする？

「もっと頻繁に由衣さんに会ったらどうだ？」

長年のつきあいから蓮の内心を察した鹿野内が提案する。

「なるほどな。では、スケジュールを調整してくれ」

蓮がそう言うと、今度は犬飼が大きなため息をついた。

「まあ……素直なのは結構ですけどね」

「いつもはまあまあ完璧なのに、由衣さんが絡むと途端に空まわりし出すな」

「うるさいぞ」

車を走らせながら呟く鹿野内の言葉に、蓮はムツとした顔になる。

だが、蓮の機嫌などお構いなしに、今度は犬飼が口を開く。

「わたしたちも由衣さんのことは昔から知ってますからね。思い入れがあるんですよ」

二人からあれこれ言われ、蓮は不機嫌な顔のまま外を向いた。

「だいたい、由衣さんのことを好きだったことを、当の本人がまったく意識してないのが問題なん

ですよ」

「さっさと普通に告白すれば良いのに……」

側近二人がこそと話していたけれど、蓮の耳にはもはや入ってこない。

蓮の頭の中には久しぶりに見た由衣の顔が焼き付いている。

元氣そうでよかった。

そう思い、蓮はようやくホッとした。

6

蓮の突然の訪問からまた一週間が過ぎた。その間も由衣は蓮に毎日連絡をしている。昔から、なぜか蓮の言うことは素直に聞いてしまう由衣なのだ。

仕事にもかなり慣れ、お茶も短時間で淹れられるようになったし、コピー機の操作もすっかり覚えた。雑用は一通り出来るようになったので、今はパソコンでの仕事を教わっている。新しいことを教わるというのは、知識が増えていくこと。元々多方面で勉強熱心な由衣だったので、毎日が楽しくて仕方なかった。

「由衣、今のうちに備品の配達行こうと思うんだけど、行ける？」

パソコンを操作する手を止め、由衣は顔を上げて環を見た。

「はい、行けます」

急いでファイルを保存して立ち上がると、自分のタブレットを持って環のあとに続いた。

備品倉庫に入り、環に指示された発注書をチェックしながら、小さなコンテナに備品を入れていく。

「わたし、この作業結構好きなんです」

由衣がそう言うと、環がわたしもと笑った。

「なんか楽しいよね。お店屋さんみたいで」

二人で和やかに話しながら作業を進め、たくさんのコンテナを台車に載せた。そのうちのいくつかは総務課の出入り口にある棚に置く。これらは他の部署の人が直接取りに来るものだ。

「じゃあ残りをお届けにいきましょう」

環に言われ、由衣は残ったコンテナの載った台車を押した。

「これは取りに来ないんですか？」

由衣が尋ねると、環が頷いた。

「それは総務で管理している各所の備品だからね。ついでに会社探検出来るわよ」

そう言って環が笑う。

どこに向かうのかを聞くと、環は社長室や営業部、企画部などと答えた。人手不足が理由らしい。

環が言う通り、これまで由衣が行ったことのない場所を通りながら備品を届けていく。たしかに

探検みたいで面白い。

「じゃあ次は営業部に行きましょう」

「はい」

由衣が答え、通路を歩いていると、前からちよつとした集団が歩いてきた。

「あら、あの人……」

環の言葉にその一団をよく見ると、その中心に蓮がいた。

「まあ、蓮さん。今日はなにかしら？」

環と一緒に通路の端に寄り、通りすぎるのを待つ。と、蓮が由衣を見て足を止めた。蓮の後ろにはいつも一緒に鹿野内がいる。その他の人間はこの会社の人だろうと由衣は予想した。

「由衣、頑張っているか？」

「こんにちは、蓮さん。はい、おかげさまで」

由衣が答えると、蓮は満足げに頷き、また歩き出した。鹿野内が頭を下げたので、由衣も慌てて頭を下げる。去っていく一団が見えなくなったところで、環が感心したように呟いた。

「一緒にいたの、営業本部長だよ。由衣の婚約者ってすごい人なのね」

「まあ。では本当にお仕事で来てるんですね」

蓮がどんな仕事をしているのか詳しくは知らないけれど、優秀であることは父親から聞いていた。竜崎グループの規模を考えると、本部長が出てきてもおかしくないことだろう。

蓮のことを誉められると、由衣も誇らしい気持ちになった。蓮との関係は微妙なものだし、婚約

者だからというわけでもなく、ただ子どもの頃から知っている者として、なんとなく鼻が高いというか……

つて、わたしつたらなにを考えてるのかしら。誰に説明するわけでもないのに。

ただ、由衣にとって蓮は大切な人だということは間違いなかった。

その後も由衣は会社の中を動きまわった。そのせいなのかなんなのか、やたらと蓮を見かける。

いったいなんの仕事で来ているのか、由衣と同じように社内をあちこち移動しているようだ。お昼休みに環らと社員食堂に行くと、なぜか蓮もそこにいた。

同じテーブルではなかったけれど、すぐ近くにおいて、ちらつと視線を向けるといつでも目が合った。そのたびに由衣の心臓はドキドキして落ち着かない。

それにしても食べ難い……

そんなことを思いつつ、日替わり定食を食べていると、由衣の前に小さなサラダが置かれた。

なんだと顔を上げると、蓮だった。

「もつと野菜を食べなさい」

それだけ言うと、蓮は元いたテーブルに戻る。環たちはビックリした顔をし、蓮と一緒にいる鹿野内や営業本部長はなんとも言えない表情をしていた。

もう、蓮さんったら子ども扱いして。

由衣は恥ずかしさに顔が赤くなるのを感じながら、もらったサラダを一口食べた。

そんな由衣を見て、蓮はまた満足げに頷く。